

経済復興の牽引役から環境共生の街へ ～ドイツ・ルール工業地帯の再活性化～

土屋 智子

1995年国勢調査によると、90年に比べ人口減少率の高かった10市町村のうち、5市町は北海道空知の産炭地であった。北海道以外でも産業構造の転換に伴う炭鉱や製鉄所の閉鎖によって、地域の経済・社会に大きな影響を受けた街は少なくない。日本と同様、奇蹟の経済復興を遂げたドイツでも、「石炭と鉄の街」の再活性化は大きな課題となっている。ドイツを代表するルール工業地帯では、89年以来大規模な再活性化プロジェクトが進められている。

1. ルールの光と陰

ルール工業地帯は戦前から工業化が進んでおり、豊富な石炭資源、ライン川に接する立地条件、生産設備と資本の集積、そしてドイツ最大の人口によって、ドイツ経済の復興と高度成長の牽引役となった。1953年には、旧西ドイツの就業人口の41%がこの地域に集中していた。都市域が急拡大し、古い街並みや建物が失われ、環境も悪化した。加えて、高度成長期の労働不足を移民によって補ったため、移民だけが暮らす住宅地域（ゲットー）が形成された。

第1次石油危機を契機に、ドイツ産業も石炭・鉄鋼を中心とする素材産業から自動車や電子部品などの機械産業へ転換し、ルール地帯の雇用機会は急減する。80年代後半には、南部の州の失業率が5~6%であったのに対し、ルール地域を抱えるノルトライン・ウェストファーレン州では11%に達していた。

人々は技術や知識集約型産業が立地する南の州に向かって移動していき、ルールに残されたのは、崩壊した旧市街、ドイツの水準としては

劣悪な住宅、単純労働者と移民、放棄された工場や建物、汚染された土地と川であった。

2. エムシャー川流域の再開発計画

ノルトライン・ウェストファーレン州は、ルール工業地帯の経済・社会状況を危機的状況と判断し、89年IBAエムシャー開発公社を設立して「環境改善・保全と産業振興を両立させる」再開発計画に乗り出した。IBA（Internationale Bauausstellung）は直訳すれば「国際建築展覧会」であるが、事物を展示するものではなく、活動プロセスそのものを指し、欧州各地の再開発の実施母体となっている。エムシャー開発公社は州からの100%出資で設立され、これまでの再開発に約25億DMを投入した。

再開発対象地域は、ライン川の支流であるエムシャー川流域約800k㎡（東西約75km、南北10~12km）で、デュッセルドルフからドルトムントに及ぶ17市町を含んでいる。産業用水によって汚染されたエムシャー川を再生し、さらにこの地域に住む200万人の人々の生活と労働環境を改善することを目的とし、90あまりのプロジェクトが進められている。開発公社によって作成されたマスタープランは、次の4つにまとめられる。

第一は環境改善プロジェクトである。脆弱な地盤とコストの問題から、この地域では地下埋設の下水道は作られず、自然の小川であったエムシャー川が産業用水路に改造され、炭鉱や工場の排水が流された。支流などを含め総延長350kmを再び自然の小川に戻すプロジェクトが地道に進められている。また、ぼた山に植林を

したり、工場跡地の環境回復が行われている。これらのプロジェクトでは、ビオトープ（生態系回復）の手法が取られ、20～30年計画で進められている。

第二のプロジェクトは、企業誘致・育成による雇用創出である。環境関連の研究所や污水处理など環境改善に関わる会社、知識情報関連企業の誘致、手工業を中心とした地場産業の育成を目的としている。

複数の研究所が入居するラインエルベ・サイエンスパーク（写真1）は長さ300mのガラスのアーケードをもつ建物で、自然の光と風を感じられる開放的なカフェテリアを研究者に提供する。建物は人工池に面し、隣には保育園が併設されている。手工業や中小企業のためのオフィスは石炭・鉄鋼会社の建物の内部を改造したものである。開発計画は、地域全体の住環境やインフラ整備、交通計画とも関連づけられ、開発にあたっては建物の景観や芸術性、環境保全・再生、環境負荷軽減、省エネが検討される。地域の開発プランを一開発業者に任せて全体の整合性をとるといった包括的な開発手法がとられている。

第三のプロジェクトは住環境の質的向上である。先にも述べた移民が集中して暮らすゲッターの多くは、壁で囲まれ、工場に近く、住宅の質も悪い。トルコ系移民の多いポートロップ市ヴェルヘルム地区では、裏に畑を併設した一戸建てやテラスハウスを建設した（写真2）。これらの住宅では、伝統的なドイツの住宅の屋根が模倣され、一軒ごとに異なる外観をもちながら地区全体としては統一感のある設計になっている。「トルコ人は野菜や花づくりが好きだ。新しい家になっても同じ様な生活ができるようにした。人の顔が一人一人違うように、家の顔も一つ一つ違う方がいい。」案内してくれた Rickenbrock 氏は生活者を尊重する公社の方針をこう表現した。

もちろん、伝統にこだわらず、若い世代や新しく立地した企業で働く人々のための近代的な住宅も開発されている。しかし、近代的な建物でも近隣の人々とのコミュニケーションがしやすくなるような配慮（庭の共有化など）がなされている。

最後に、アミューズメント施設やレクリエーション施設づくりがある。高さ100m円筒形のガスタンクは、近代産業のミュージアムに生まれ変わった（写真3）。中には、炭鉱労働者が使った道具からテレビまで生活用品や産業機械が展示され、この地域では非常に人気のある施設となっている。製鉄所は近代産業のモニュメントとして残され、コンサートなどの催しに利用されている。研究所として生き返った採掘所もある。また、植林されたほた山周辺は後々市民のためのスポーツとレクリエーションの場になる予定である。

ガスタンクの頂上にはたつと、眼下には緑ひとつない工場地帯が広がり、黒いエムシャー川が流れている。ヒューマンスケールをモットーとする開発公社のプロジェクトはやっと成果が表れはじめたばかりであり、今後も努力が続けられなければならない。近くでは、市の開発計画による大規模ショッピングセンターが建設中で、市と公社の計画をどう整合するかも今後の課題である。しかし、着実に「鉄と石炭」の街は変化しており、その変化は、環境共生の国づくりが進むドイツ全土の変化をも象徴している。

日本でも、北九州市が環境共生住宅づくりなど環境保全型の再活性化に取り組んでいる。北九州市の90-95年の人口変化率は-0.67%で、大阪市の減少率よりも少なかった。「環境と経済」を両立させる知恵が地域から世界から発信されはじめています。

この調査は、有識者会議第一研究グループ「ドイツ・スウェーデンの環境・エネルギー政策に関する調査」(95年8~9月)の中で行われました。

(つちや ともこ
社会システムグループ)

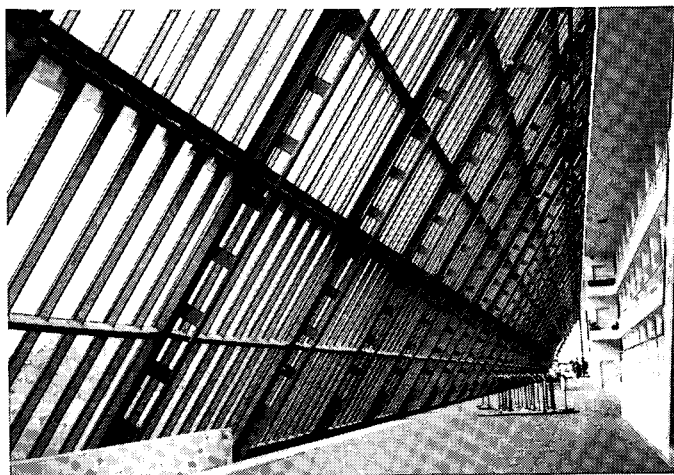


写真1

ラインエルベ・サイエンスパーク

全長300mのガラスのアーケード。いくつもの研究機関が入居する予定。夏は巨大なガラス窓を開閉して自然の風を入れる。

写真2

ヴェルヘルム地区の新しい住宅

一つ一つ外観の異なる住宅であるが、屋根の色や形で統一感をもたせている。手前は小さな菜園と庭仕事用の納屋。軒下には雨水管が埋設され、雨水を集めてエムシャー川の浄化に用いられる。

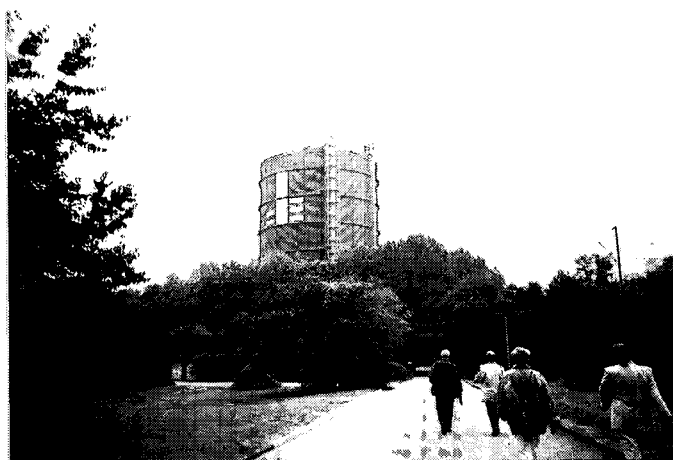


写真3

ガスタンクを再利用した近代産業ミュージアム

石炭・鉄鋼会社の役員たちが暮らした高級住宅街を抜けると、林の向こうにガスタンクが見えてくる。